

異邦人

区の公会堂で（クラシックギターの誘い）があるというので聴きに行った。十月の肌寒い夜である。音楽に造詣があるわけではない、偶々、たまたま区の広報紙で低額料金の案内を見てその気になったのだ。（アランフェス協奏曲、禁じられた遊び等映画音楽）の表示に惹かれた。滅多にない夜の一人外出である。駅前近くの公会堂までは路線バスで行った。

（アランフェス協奏曲）はフィギュアスケートのテレビ中継から聴いた音楽である。冒頭に奏でられる厳かな旋律、哀切を刻むギターの音色、氷上を華麗に滑る演技者以上にこのメロデーに聴き入った。深い悲しみを湛えたような切なさがじわじわ伝わって来た。この第二楽章は世界的に流布している名曲と言われるらしいが自分は数年前まで知らなかった。我がお粗末さの一端である。今を遡ること72年前、1940年（昭和15年）にスペインの盲目ピアニストが、戦火に踏みにじられた故郷アランフェスの街や作曲家自身の子を失った慟哭が契機となり、この曲が作られたという。（禁じられた遊び・愛のロマンス）の方は反対に、10代の頃から自分もよく聴いた音楽である。ギターを持つていた友人がこの曲を頻りに練習していたせいでもある。1952年（昭和27年）には映画音楽として採用されている。スペインの古い民謡が原曲だそうだ。ふたつの音楽に共通するテーマは戦争という過酷な運命を背景にして音符に刻んでいることだ。1940年といえは自分の誕生年でもある。物心覚束無い我が5歳、甲府市全体が灰燼に帰すのを目の当たりにしたショックは、67年過ぎた現在でも頭の隅に焼きついている。その幼かった記憶が鮮明に甦って自分はふたつの音楽に何か因縁めいたものを感じずにはいられなかった。ぜひとも、生演奏を聴きたい！、そんな期待に思いを膨らませながら演奏者へ耳を凝らした。壇上にはピアノが一台、女性の伴奏者がいる。椅子に座るギターリストの演奏に花を添えていた。女性はイングリッシュ、ホルンという管楽器も吹いた。

開演前、会場を見渡した自分は入場者の中に見覚えのある顔を見つけたのである。外国人、それも自分より年上の感じのする老人で、彼はホールの中段に居るのが照明で分かった。隣には五、六十代の日本の婦人が並んでいて時折、話しが交わされているようだった。彼は、自分がジョキングを楽しむ区立公園でたまに見掛ける人物である。或る時は日光浴のためだろうか、上半身を裸に曝して人の疎らな広い公園の芝生の上で寝そべっていた。日の盛りの暑い夏に

は木陰のベンチで本を開いているのを何度も目撃している。笑顔のない雰囲気
が人を寄せ付けないようであり、陰気でいつもポツンとした感じが漂っていた。
薄くなった白髪と赤く変色しアゴヒゲが伸びていた。小柄だが、どんな素性の
人であるか不明だった。異国で孤独を愉しんでいるというふうな気がしない
もなかった。平日の午後、だだっ広い公園へ出掛けてくる人はそうはいない。

竹とんぼや紙飛行機を飛ばす、凧揚げに興じる男性高齢者達か、あるいはコー
ラスに興ずるサークルの中年女性たちがちらほら見える程度であった。3時過
ぎれば小学生や中学生たちの集団がサッカーボールを持って遊びにやって来
けれど。公会堂で彼を発見して直ぐに公園での様々な姿を思い浮かべた。ひよ
っとして彼の方だつて自分に気が付いたら、おやつと思ふかもしれないだろう。

演奏会の帰り道である。自分は始発である一駅先のバス停留所まで歩いて行
き発車を待っていると、彼が婦人と後列に並んでいるのに出っ食わした。婦人
はどうやら彼の連れ合いらしい。彼が自分を見ている。瞬間、眼を会わせた。
すると、自分に向かつて軽く笑顔で会釈をしたのである。反射的に自分も身体
全体を揺らせて返礼をした。驚いた！公園での印象とはまるで別人だった。音
楽会での偶然の出会いとはいいいながらまさか彼が自分に笑顔を送ったとは。そ
れは自分に途轍もない感動を与えた。言葉に出来ないような妙な喜びが頭を駆
け巡っていた。心地好い気分眼を閉じて浸り込んでいると、夫妻は自分より
二つ前の停留所で降りて行った。その際も前席に坐っている自分の肩へ軽くタ
ッチしていったのである。(おい！同士よ、今夜は良かったじゃあないか！)と
いう無言の挨拶であった。

十一月に入って最初の日曜日だった。昨年の東日本大震災を受け、今年、地
域でも春の三月に続いて二度目の震災訓練が執り行われた。避難場所は例の区
立公園である。朝十時に大地震発生を想定、防火防災による避難勧告が告げら
れる。指定された場所へ集団移動するのだ。責任者に誘導された住民たちがゾ
ロゾロとやって来た。若きも老いも、男も女も、子供たちも、公園に隣接する
あちらこちらの小道から公園入り口を目掛けて集まった。自分もまた、その内
の一人として訓練に参加した。広い公園の中央には、すでに前日、設営されて
いたらしい大テントが二張り張ってあって茶色の帽子を被り腕章を巻いた区の
男性職員が十数名佇んでいた。中には自治会の役員等もいたのだろう。公園の
入り口からは二列縦隊じゅうたいになって枯れた芝生を踏んで中央へ進んで行く。生憎の
どんよりした曇り空であった。・・・その時である。公園を囲む緑色のフェンス

の一郭で、顔を近づけて公園を覗き込むような彼を発見したのだ。赤茶色のなめし皮のような半コートを羽織っている。始め彼とは判らなかつた。妙な人がいるなあ！という感じだつた。彼の方からは大勢の行列の中に、フェンスに張り付く彼の姿を訝いぶかしんでいる自分など到底、気がつくはずはない。何時までも同じ姿勢で見学していることが更に自分を不安にさせた。どうしたんだろう、疑問が広がっていく。フェンスに張り付いている様子は何時もの彼とは全然違つている。興味本位の見物とはどこか違う、そう思つた。避難訓練は一時間で終了した。消防署長からの話があつて解散になつた。顔見知り同士がお喋りしている。天気がよければ更に大勢の人が芝生へ坐つたかも知れない。自分はフェンスの向こう側に佇たたくむ彼を目掛けて小走りに走つた。どうしても彼を公園の芝生の中へ誘もたらいたかつた。そうして何か話しをしたかつたのだ。先夜の音楽会での一件が動機を齎もたらせてくれた。今まで何度も公園で落ち合いながら一度として言葉を交わしたこともなかつた異邦人、果たして日本語が通じるかどうか、それさえ疑問だつたが今日はなぜかそんな恐れさえ感じることはなかつたのだ。．．．ところがどうであろう、彼の日本語は非常に巧みであつた。自分の懸念が杞憂であつた。芝生の上で彼と会話が成立する。お互いの簡単な自己紹介があつて彼の祖国がポーランドであることが分かつた。

(ボクの名前はサミエルです。ご存知ですか、青春という詩人、サミエル、ウルマンと同名のサミエルです)。．．．(ああ、知っていますよ、【人は信念や希望と共に若く、疑惑や失望と共に老いる】の作者でしょう、(ポーランドのお国といえ、若い頃【灰とダイヤモンド】の映画を拝見しています)(ええ、いい映画ですね。ポーランドはサッカーと芸術の国です。すでにノーベル文学賞も何人か輩出しています)彼はそう言いながら満面の笑みで自分を讃える。そんな会話を釣られるように自分も若い頃からの趣味で小説を創つている日々のことを話した。と、彼は夫婦で共に翻訳を生業なりわいとしていることを打ち明けてくれた。日本とポーランド双方の翻訳をするのだそうだ。但し、版元がなくて苦労するらしい。でも互いの国の素晴らしいライターと出会つた時ほど翻訳業の喜びを感じることはない、というのだ。双方のアドレスを交換した。

(もうこのアドレスも数日のものです。日本での生活が33年になります。楽しい生活ですが、もう充分、日本人ですよ、帰化はしていませんけれど。いざれお手紙を差し上げましょう)彼は急に声を落してそう呟つぶやいて立ち上がった。数日をおいて彼からワープロ仕立ての手紙が届いた。異邦人として、それは

眼を睜みはらせるものであった。格調高い文章と言う他はない。

【あなたが・・・ライターであることを聞いてからボクは自分の過去をお話ししたくなりました。どうぞ、聞いてください。・・・ボクは今年七十七歳になりました。日本では喜寿といえますね。ボクがちょうど十歳の時です。・・・故郷のポーランドはドイツ軍に占領され、例の悪逆高いホロコーストへの序章、大量虐殺へのユダヤ人狩りが始まったのです。ワルシャワ市内のマリーモン地域にあったボクの家は、パパもママもユダヤ人でした。パパは銀行の役職に就いていましたしママは小学校の教師でした。二人の姉とボクの五人家族はクリスチャンで平和で楽しい家庭を営んでいたのです。ところがナチスのユダヤ人排斥が起こると容赦もなくユダヤの人々は収容所へ連れ去られていきました。夥おびただしい数のユダヤの人々です。隣国へ避難しようにもドイツ兵が鉄道や幹線道路を押さえていて身動きが困難で出来ません。リトアニア人も恐ろしい人達という噂でした。ソ連とドイツの戦争の狭間はざまで身動きが取れません。到頭、ボクの家族全員がナチスの憲兵隊に捕まってしまったのです。何も持たずに連行され、パパは一人、アウシュビッツの収容所へ送られました。ママと二人の姉とボクはワルシャワ強制収容所です。子供も年寄りも病人さえも平気で拉致していきました。誰もが不安と悲しみと憤りに暮れていたのです。噂では、この強制収容所はガス室での殺人が連日連夜行われているというものでした。大人たちは怯おそえていました。反抗すればたちどころに銃殺されるのです。始末が悪いのは迫害を逃れるためにナチの手先として働くユダヤ人もいたことです。最後は彼等も利用された挙句、ドイツ兵によって死に追いやられるのですが。1943～1945年にかけてヨーロッパ全体で何百万人のユダヤ人の命が消えていったようです。ボクの家族もボクと一人の姉を除いて全員が収容所で命を落しました。ジェゴダ（ユダヤ人救済委員会）によってボクらは奇跡に助かったのです。ボクは小さいながらもその経緯いきさつを鮮明に覚えています。生き残った姉とボクはパパの銀行での伝手ついでを頼りにオーストリアに移り住みました。姉はそこでオーストリア人の機械技師と結婚、ボクは家庭を持つことを考えませんでした。したが、ウィーンへ留学に来ていた日本の女学生のドイツ語の語学教師となり、恋に落ちたのです。あんなに憎んでいたドイツの言葉を生活の為とはいえ教えなければならぬボクの苦悩、生きるためとはいえ豹変したボクの何と醜い内面なのでしょうか。・・・彼女は須磨子さんといひ当時20歳でした。当時のボ

クは35歳、15歳の歳の差がありました。彼女が優しさと控えめな態度がボクの深い傷を癒してくれたのです。須磨子さんは留学を終えるとオーストリアの貿易会社へ就職、ボクは様々の国の若者達の、ドイツ語、英語の語学教育に携わりました。結婚当初はウィーンに住んでいましたが彼女の父親が日本で亡くなったのをしおに、たつての願いで日本へ移住することになったのです。ウィーン生活は十年に及びました。須磨子さんとなら何処までも一緒に暮らすことが出来る、そう確信しました。生憎、ボク等夫婦には子供を恵まれませんでした。日本では平和で穏やかな毎日を送ることが出来ました。日本では須磨子さんのお母さんと一緒に暮らしています。十年ほど前、二人でワルシャワへ帰りましたが街並みもすっかり変わり果てていました。半世紀、五十年以上が過ぎるので無理はありません。故郷ポーランドは、遠く懐かしむところになってしまったのです。

今日、避難訓練を眺めていたのを、あなたは不思議に思ったでしょう、が、何時ものように公園へ散歩に出たボクは沢山の人が歩いて行くのに会う内にあの忌まわしい悪夢が甦ってきたのです。公園へ入るのに躊躇ためらいがありました。ワルシャワ郊外へ、突然、建てられた野原の中の巨大収容所、その強制収容所へ連行されたユダヤ人の行列の姿が重なって眺められたからです。広い芝生をゾロゾロと歩く老少男女の姿は連行される風景とひとつも変わらないものでした。死の行進、でした。虐殺への一歩、二歩だったのですから。あなたには、到底、あの恐怖が理解し難いと思います。

ボクはあと何年生きるか分かりませんが、しかし、翻訳という仕事を通して人間の残酷さを訴え続けて行きたいと考えているのです。人類の歴史は闘争の歴史でもあることは言うを待ちません。勝てば官軍、それが正義になります。それでも歪んだ歴史を正すのも、ペンの力と信じています。

あなたとお話したらボクはこんな身の上話をしたくなつたのです。残念ですが公園にはもう足を向けることはないでしょう。何故なら、須磨子さんのお母さんが熱海のポスピスへ入所、あちらへ住まいを移すことになったからです。子供のいないボク等夫婦もいずれはこちらの老人ホームへ入ることになるでしょう。好きな音楽を聴き好きな本を読み、そしてささやかな使命感を抱きながら余生を送る積もりです。あなたもお元気で良い作品を書いて下さい。あちらに落ち着きましたら、またお便りします。じゃあ、さようなら・・・

十一月某日

サミエル (自筆サイン)